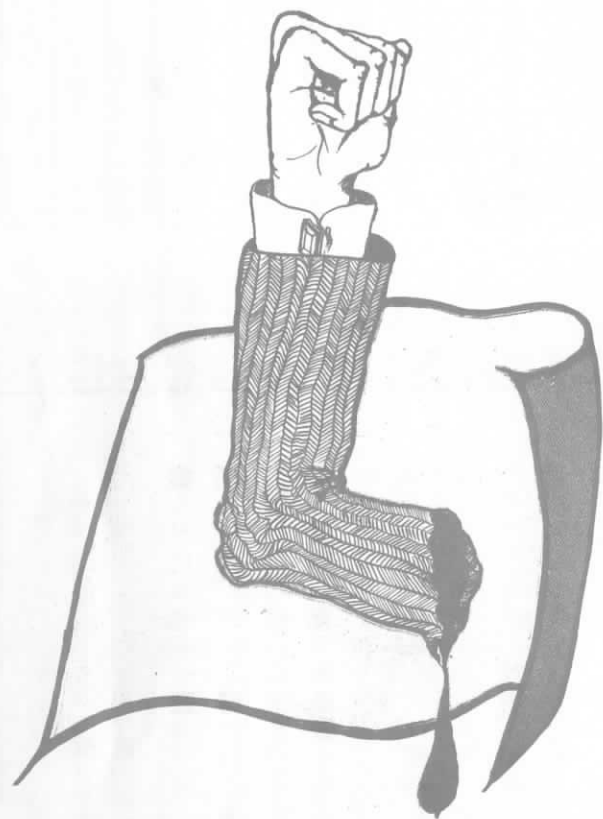


リベルテール

4月号



Libertaire VoL, VI, No 5

無 政 府 主 義 誌

昭和45年9月4日第三種郵便物認可
昭和50年4月15日発行第64号

リベルテール 定価一〇〇円(郵便料共)

- リベルテール Le Libertaire
- 1975年4月15日発行 VoL, VI, No 5
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方 リベルテールの会

人 才 提 升 人 才 培 训 人 才 培 训 人 才 培 训 人 才 培 训 人 才 培 训 人 才 培 训 人 才 培 训 人 才 培 训 人 才 培 训

今回はルート誌(米)一九七四年三月号所載のインタビュー記事にカプーターのゆくえを探ってみます。このインタビューはグレイフォックス氏とファンダイン君の間で行われ、組織のあり方、その機能、運動の内実等語っています。(文中Gはフォックス氏、Vはファン・ダイン君)

G 一九七一年一月に貴方とインタビューした際、カプーターの未来について大変楽観的でしたが、一九七一年一月以降カプーターに何が起きたのですか。

V カプーターの内部事情と幾つかの主題についての意見の相違でした。例えばオランダ国民議会に参加するかどうか…というのです。

G 選挙は何時でした？

V 一九七一年五月二十八日でした。ある人達は参加を希望し、他の人は反対でした。反対の人の意見は、われわれが余りにも体制側の方式を採用しすぎるというのです。ぼくは参加賛成でした。なぜかという会議で発言

の機会を持つのは代替社会の訴えをするのに都合がいいから。だけど選挙に参加したのは不幸でした。内部闘争で失ったものが大きかった。選挙に参加すべきじゃなかったのです。それが答えです。内部闘争でぼくらが敗退した理由は自分達が何をやっているのか判らなくなったことです。その上市議会での行動、例えばハッシシを吸うというようなのが不適当だった。

G ハッシシですか？

V そう。やった人達はパラダイスやコスモスという高級クラブでハッシシを吸うのが認められているなら阿姆斯特ダムの市会でやった方がいいじゃないか、民衆は数グラム所持しているというだけで長年ブチこまれるんだから…というのです。

G あなたも含めて皆で吸ったのですか？

V いや、ぼくは煙草も吸わないからやりません。カプーターの運動家二人が抵抗運動として吸ったのです。

G で、それをやった日時は？

V 七一年の二月です。

G 市会でハッシシを吸ってどうなりました？

V 警官が来て二名のカプーターは逮捕されました。でぼくは市会で市長を立合人として身体検査された。ぼく

はそういうのは嫌いです。小さな事に注意を引きすぎるから…。麻薬を自由に使う権利はあると思う。だけど他にもっと重要な問題があるのです。アムステルダムの住宅不足、汚染、交通問題等。だからハッシシ喫煙事件は賢明じゃなかったと思う。右派の新聞は大見出しで書きたて、多くの人々はぼく等が変わった事をやると思ったでしょう。

G 最初討論しなかったの？

V しました。

G どこでやったのですか。

V 人民集会です。何人かはあの行動に賛成で、他は反対でした。それで起きた訳。よくないことでした。

G 前回のインタビューで貴方が話したのでは、会員はカプーターの政策について行こうと思うなら、ついで行く権利がある。では若し市議二名がハッシシを吸うことにきめ、三名が駄目だと反対するなら、やるべきじゃないと止めるべきでしょう？

V ぼくは言いましたよ。「ぼくは君達に同意できない。でもやりたければやればいい」ってね。やっていけない理由はないでしょう。だけど結果はカプーター内の信頼の欠如でした。考えられるのはカプーターの会員はエ

ゴで動き民衆の問題との接点を失ったのです。沢山の問題があったのです。例えば地下鉄の建設。これはアムステルダムの中心地ニューマーケット地区を通り、それを許すと多くの家が立退かねばなりません。でぼく達は反対したのです。代替として路面電車、バス、自転車等を提案しました。ぼく達はニューマーケットの住民と一緒に反対したが、市会はその後、命令書で三百戸の建物を壊すことにしました。地下鉄を通すためにです。

G で、その問題ではカプーターは一致して地下鉄建設に反対したのですか。

V そうです。でも反対のための戦術では意見の差異があった。あのハッシシを吸った二人が汚物爆弾を投げたのです。市議会開催中に：でぼくはその戦術に同意しなかった。結局警察がきて議事は一時間中断です。

G 投げた二人は逮捕されましたか。

V いや投げたあと逃げました。

G カプーターの人達ですか

V フラン・ファン・ボメルとコニーボスの二名です。ぼくはあれは悪い方策だと思う。暴力は使うべきじゃない。論議すべきです。

G おっしゃる所では暴力はいけないとの事だが、汚物

爆弾は暴力ですか？

V この場合はそうです。討論をさまたげるから。もしそれを対抗暴力というなら、ばくは市議会だって全く悪いとは考えません。現在ではその代替が警察国家になっている。だからばく達はアムステルダム地域コミュニティに非形式的デモクラシーを組織化する間は、少くとも形式的デモクラシーを支持すべきだと思います。

G 以前貴方はカプーターは市議会への大使だと言いましたね。

V ええ。

G その意味は市議会を外国政府としか認めないことでしょうか？

V そうです。

G ところが今の話では政府と共働すべきだということですね。

V ええ、共働はOKです。けど大使が共働するのと同じやり方ですよ。

G 前回のインタビューでは、貴方は政府の真实性を認めないと言った。つまり政府はそれが存在するから対応するのだとね。今でもその態度は変わりませんか？

V 変えていません。大使とは貴方が代表する国の実際

的利益を代表しなければなりません。その国とはオレン

ジ自由国です。だから大事なのはオレンジ自由国を組織

することです。今回だとニューマーケット地区の住民です。

この地区の住民を組織するとは、地下鉄建設に反対し、例えば学校を建てるという運動をすることです。だから問題は、ニューマーケット地区でどのようにオレンジ自由国を組織するか、また公共交通問題の一般的理解を徹底させることです。ばくは汚物爆弾を提唱するグループに反対した。何故なら論議の代りに暴力を用いれば大使の仕事は不可能にするからです。あの事件の後、多くの人はばく達のやる事に賛成しなくなりました。それがオレンジ自由国解体の出発点だった。

G 地下鉄はどうになりました？

V 建設中だけど、ニューマーケット地区の抵抗も活発です。地下鉄工事は進んでいるけど中心部には達していない。だから希望はあります。というのはルートを変えることができるし、ばくはそれがいいと思う。

G 民衆が実力行使で工事を止めるチャンスはありますか？

V ええ、民衆はやっています。夜の間に穴を砂で埋めるんです。でも実効はなかった。一種のサボタージュで

すね。でも何かやるべきでしょう。結局工事が中止され

たのは費用がかかり過ぎるという事でしたがね。五十万ギルダーかかるそうです。同じ金で路面交通なら立派なのがでます。つまりアムステルダムのお偉方は最初のプラン通りに地下鉄を作らないことにしたのです。

G 汚物爆弾が投げられた頃、オレンジ自由国の各省は活動していましたか。

V ええ。

G 新聞はどうです？

V カプーター・クラント (Kabouters Krant) ができていました。それから五月の選挙で駄目になった。

G ばく達は二月の事を話しているんですよ。二月には選挙を考えなかったでしょう。どうしてそうなったのですか？ ミーティングで討論したんでしょう。

V ええ、アムステルダムでの人民集会で全くよくやりました。でも選挙に参加するというイニシアチブをとったのはニジメゲン地区の人達で、彼等が始めるとすぐばく達の何人かが参加したのです。ばくは候補者にはならないけど支持しました。

G 貴方は自分が国民選挙の参加にあたって、その背後で働いたといわれているけど…本当ですか？

V そうです。国会に大使を送り込むのは有用と考えたのです。だけど失敗した。

G どうしたのです？ どうしてその決定をしたのですか？ カプーターの分裂は何が原因でしたか？ ミーティングで討論したのでしょうか？

V ミーティングでも何度かやりました。他の人は言ったものです。「ばく等は同意しない。だが君がやりたがっているのは認めよう」だからやった。けれど戦術がまづかった。賛成しない人達を動かすことは出来ないのです。それが戦術的間違いでありばく達のやるべきことではなかったのです。とにかく各省は活動していました。今でもそうですけど、連結してはやっていない。グループ活動では生化学ダイナミック農業（化学肥料を使用しない自然農業）技術部門、エネルギー代替部門等、それにばくは書くことで働いています。

G カプーター・クラントが発行されなくなったのは何時ですか？

V 夏です—そう六月—七月です。

G エコロジーアクションのある女性が一九七一年七月にここへ来訪した時、カプーターの形跡がなかった、ただ二・三のお店とスローガンだけだったそうですが、ど

うしてでしょう？

V ありうることです。オレンジ自由国が解体したからです。歴史上最初の国家消滅でした。ぼくは失望しました。

G 最後の人民集会は何時でしたか？

V 一九七一年の五月か六月です。

G 選挙の前ですか後ですか？

V 大体選挙の周辺です。

G カプーター運動が選挙の前に分裂したか後に分裂したかは重要な問題です。

V そう。選挙後です。まだミーティングはやっていません。

G 何人ぐらいの人が来ますか？

V 選挙後は少人数：約20名ぐらいです。

G 貴方は前年の夏は500名といましたね？

ええ。

G 全国紙はないのですか？

V ありますよ。

G 『アロハ』です。

G まだ発行されていますか。

V ええ。でもカプーターの新聞じゃない。色々論じて

いるけど特に音楽をやっています。

G もしカプーター運動があれば程に組織される力があつたのなら、どうして一度の敗北で分裂したのですか、ぼくには判りませんね。

V カプーター運動は終えんしたものではありません。組織として終わっただけです。人やグループは未に関係して居り、オレンジ自由国の仕事をしているんです。けれど組織化はしていない。この解体の主な原因は、カプーター運動が十分に組織されていなかったことです。つまり全国的な規模での組織的なバックボーンを持っていなかった。アムステルダムと他の幾つかの地域だけのものでした。

G そのバックボーンとは何ですか？

V ぼくの言うバックボーンとは、時々、一群の人々がミーティングする。そしてその際は共通の政策をもつてくること。その政策は非常に明確なものであること。そしてそれが全国規模になることです。それがアムステルダムとハーグには実在したが他にはなかったのです。だけど厳密には意見の相違でした。これはひどいと思う。意見の相違というのは、平和主義者とテロの考えを弄ぶ人との間の相違です。別な言い方をすれば、アナーキストとマルクスの影響を受けた人との相違です。オレンジ自由国が崩壊したのはそれが真因です。

(つづく)